

東京大学大学院 農学生命科学研究科附属 食の安全研究センター 特任教授／
北里大学 獣医学部 教授／東京大学 名誉教授／日本学術会議 会員・吉川 泰弘
Yasuhiro YOSHIKAWA, PhD, Professor, School of Veterinary Medicine, Kitasato University,
Emeritus Professor, The University of Tokyo,
Member, Science Council of Japan



○吉川座長

座長を引き受けた吉川です。今は北里大学で人獣共通感染症という、厚労省的には動物由来の感染症という教室で、主に感染症のコントロールの講義をしているんですけど、その中にはきょうの話題になる畜産品を含めて食中毒から、あるいは食品由来の感染症というのも獣医の学生には知っておいてもらわなければならないテーマなので、時たま、きょうしゃべられるお三方の話にかかわるようなことを教えていますけれども、3人で3時間だから、きょうは少し余裕があると思うので、余りタイトでない形で進行できたらと思っています。

3分くらい時間をもらって、何か座長らしいことを言わなきゃいけないような気もするんですけど、趣旨はそこに書きましたけれども、よく内閣官房とか呼ばれて話をするとき、食の問題は要素が本当は三つあって、食の安全と一まとめで言っちゃうけれども、本当は、一番の根底にあるのは食料の安定供給の問題で、食べ物がないと食の安全なんてないという。きょうもテレビで、アフリカで数千万人に及ぶ飢餓が出て、国際的に援助を求めるアラームを出していましたが、幸い日本の自給率はわずか40%ですけども、60%輸入して、それでも満腹に食えているという状況は感謝しなければいけないけれども、しかし、それが今後ずっと続くかどうかは必ずしも保障できる問題ではないという気がします。

きょうの話題の中にも出てくるかもしれない高病原性鳥インフルエンザとか、口蹄疫というのは、食べて安全か危険かという問題ではなくて、食べ物は確保できるかどうかという、もっと本質的な国際的な獣医の問題ですけども、何となく日本に来ると、食べて安全なんですか、危険ですかという、ただその一言で問題を葬ってしまうけれども、世界的に見ると、むしろ食べ物を確保することのほうが実は大きな問題で、家畜の感染症を現場で、きょうの話も出てくるかもしれ

ません、農場を含めて、リスク管理側が必死でやっているのは、世界的なそういう食料の調達というか、供給源を確保するというのも獣医の最も本質的な役割の一つです。

BSEとか、後で食品安全課から出てくる放射線の問題は、まさしくここにある食の、あるいは食品の安全性にかかわる問題で、食品安全委員会がかなり、もう10年弱になりますけれども、リスク評価という新しい役割を負って、そこでも半分ぐらいは獣医さんで、新しい分野として活躍していますし、本当はその上に食の防衛という余り聞きなれない問題があって、食の安全システムが確立しないと食の防衛というのは実質上ざるで、できないんですけど、中国の冷凍餃子のように微量の農薬が混入してくるかどうかという問題ではなくて、でき上がっているシステムを破戒しようという、バイオテロとかアグロテロとか、初めから、性善説ではなくて性悪説に基づいた食のコントロールというのも本当は必要になりますけれども、日本ではなかなかまだそういうものを、正面切って議論する機会というのは余りありませんけど、食には三つの大きな要素があるということと、その三つの因子というのはそれぞれイーブンに並んでいるわけじゃなくて、1階建て、2階建て、3階建てという関係にあると理解しておいてほしいと思います。

そんな思いを込めてイントロのところの文章に書いておきましたけれども、何かいつの間にか我々は安全神話の中にどっぷりとつかって、崩れたたびにパニックを起こすということを飽きずに繰り返しているので、きょうはそろそろ、それを突破するにはどうしたらいいかという、それは消費者のほうにも、リスク管理する側にも責任を、あるいは評価する人にもイーブンに負ってもらわなければいけないんじゃないかという気がしますけど、その辺はまた三方のプレゼンテーションをいただいた後で議論をしたいと思います。

ちょっと5分ぐらいの時間をもらってしまいました

けれど、そういう趣旨で、上流から下流、あるいはそれを客観的に評価する機関の方からそれぞれの視点で食品の安全確保というテーマでお話をいただきたいと思います。

それでは、最初はファームの畜産現場、ここから見た安全性確保の取り組みということで、農済山形の酒井淳一先生、よろしくお願いします。

